

## 第19回国際熱年代学会議開催 (Thermo2025) 開催報告 Report on the 19th International Conference on Thermochronology (Thermo2025)

長谷部徳子\*・現地実行委員会委員  
Noriko Hasebe \* and Member of Local Working Committee

\* : 金沢大学, Nihon University

### Thermo2025 概観

2025年9月14日(日)~9月20日(土)に第19回国際熱年代学会議(以下Thermo)を金沢市商工会議所で開催した(図1)。日本地質学会に共催して頂いたが、不運なことに年会と一部重なってしまったため、共催の恩恵は限られていた。会場は貸切とし、1Fのホールを口頭発表の会場とし、2階をポスター発表の会場とした(図2)。会議の運営は株式会社PCO(富山県)に全面的にサポートを依頼し、ウェブサイトの作成、参加費の徴収、会場の設営・食事等の手配などを担当していただいた。これまで担当された会議は地球科学系とやや文化が異なるためか、英語の表記や地質巡検の手配など、不安になることもあったが、結果的にはお願いして良かったと感じている。

事前の準備にかかる情報共有にはSlackを活用し、月に1度オンライン会議を実施した。定常的に会議に参加して汗を流していただいた皆様はLocal Working Committeeのメンバーとして、実質的な会の運営に携わっていただいた。

会議に先立ち11日-13日には立山黒部アルペンルートを核とするプレ巡検も行った。詳細は中嶋(2025月号)に譲るが、PCO(株)経由でJTBに宿の予約やバスの手配をお願いしたところ、料金は高かったものの、ホテルや食事には大変満足であったとの感想を伺っている。

ポスターセッションおよび口頭セッションプログラムについては過去の多くの会議のフォーマットを踏襲した。すなわち月曜日から金曜日を学会とし、中日に巡検を入れる。前半2日間は基礎研究を、後半2日間は応用研究発表の場とする。ポスターも前半と後半で入れ替える。しかしながら基礎研究の発表数が少なめであったため、前半にも応用研究のセッションが開催された。これは発表申し込み数に合わせて口頭の枠を割り振ったせいであるが、そもそも応用研究のセッション数の方が多かったこともあり、基礎研究の口頭枠の割合を増やしても良かったかもしれない。

### 参加者数

会議には24カ国から205人の参加を得た。世界の中での日本の立ち位置である極東の島国での開催ということで、事前に参加者数を見積もるのが難しく、会議開催の準備には難渋したが前回のイタリア並みの参加者を得ることができた。半数はアジア・オセアニア地域から、1/4はヨーロッパから1/4は北米からの参加者であった(図3)。やはり日本開催ということで、ヨーロッパからの参加者は少なかったが、その分を中国からの参加者が埋めたことが見て取れる。2000年以降、ヨーロッパ外で開催されたThermoとしては2000年オーストラリア(約150人参加)、2008年アメリカ(約100人参加)、2012年中国(参加人数は不明だが

アブスト投稿数約 150 件、キャンセル多数)、2016年ブラジル(約 130 人参加)、および 2021 年アメリカ(コロナ禍により参加者はアメリカ国内在住者に限られた)があるが、その中では最大の参加者数を得ることができた。本会議は参加者数の点では成功だったと誇ることができる。余談になるが、中国からの若い参加者には、イヤホンで自動通訳機能を利用している人もいたようである。時代の流れを感じた。

### ポスターセッション

前回の Thermo2023 (イタリア開催)では屏風状にジグザグに組んだポスターボードが用意された。そのため、議論できる場所が狭かったという声があったため、本会議ではスペースの確保に努めた(図 4)。その点は好評だったと思う。また学生賞(後述)を出す都合上、特に審査員の先生方は熱心にポスターを見て回ってくれた。発表した学生からはその点は大変喜んでもらった。ポスター会場に休憩時のお茶・コーヒーを受け取る場所を設けたため、口頭発表が再開される時に休憩から戻って来てもらうのに、やや難渋した。会場の制限でできなかったが、1Fにもコーヒースペースを設けることができたならさらに良かった。ポスターセッションの際にビールを出すかどうかということが議論になったものの、今回のポスターセッションの時間が昼食後であったため自重してアルコールは出さなかった。ただ、参加者には不評だったかもしれない。

### 中日巡検

かつての Thermo 会議では、バスを連ねて全員で同じところを巡ったため、参加者同士のいい交流の機会となっていた。参加者が増えるに従い、多勢での移動は道路や駐車場の都合で難しいため、同じルートでも時間を分ける、行き先を分けるなどの対策が過去の会議でも取られていた。今回はコースを複数用意することにより多人数参加者への対応策とし

た。4つのコースを用意したところ、どのコースもある程度の希望者が集まったことから4コースとも実施した。合計でバスを5台手配することになった。地震による地殻変動を間近に見る機会となった能登巡検は人気が高かった。4つの巡検コースの詳細の報告については、長田(2025 本号)、小形(2025 本号)、長谷部(2025 本号)、および末岡(2025 本号)を参照されたい。昼食についてはバスに乗る際にお弁当を渡すという案もあったが、学会開催時期であった9月中旬は、まだ酷暑であることの懸念もあり、衛生の観点から行った先で昼食を準備することにした。変更希望者がいたり、中日巡検を登録しなかった参加者がやはり参加を希望したりで、直前まで人数が確定せず、バスの定員数の確認や昼食の手配などで混乱した。中日巡検のアレンジには PCO(株)の会場担当者が対応してくれて大変助かった。

### 学生賞

Thermo2023 から始まった学生賞を本会議でも採用した(図 5)。Thermo2023 ではポスター発表を行なった学生のみが対象であったが、今回は口頭発表、ポスターセッション 1、ポスターセッション 2 と分けてそれぞれから受賞学生を選定した。Scientific Committee のメンバーの先生方に審査員をお願いしたが、結果として審査員には大変負担をかけることになった。ポスターの発表者には 1-min-short talk をお願いし、これが優秀学生の第 1 スクリーニングとして機能することを目論んでいたが、1分では短すぎて優劣はつけ難く、結局審査員の先生方には走り回っていただくことになり、大変負担をかけた。JpGU 方式で事前に審査員をつけて絶対評価にする案もあったが、時間的にそのような準備が難しく、また JpGU のように広い分野を包括した会議ではないため、誰がどれを審査するのか、選定もなかなか難しいように感じたため採用しなかった。また Award Subcommittee からは、若手向けの賞

(Charles and Nancy Neaser 賞) の受賞者をどのように決めるべきかの議論があげられたが、学生発表賞は若手の見える化の一端として、推薦者の手助けになるのではと思う。今後の会議でどのように学生賞が運用されるか未知数であるが、ぜひ続けるといいのではと個人的には思っている。学生発表賞には賞金を出したが、そのサポートは日本 FT 研究会がしてくださった。伏してお礼申し上げる。

### ショートコース

本会議では特徴的なプログラムなどの利用法を主として、その背景にある原理やプロセスの理解も助けるショートコースが付随している(図6)。学生や若手向けの取り組みであるが、すでにこの業界でキャリアを積んだ研究者も参加して知見のリニューアルに努めることもある。今回は6つのショートコースを準備し、会議開催前の日曜日に2つ、火曜日に1つ、金曜日に1つ、会議後の土曜日に2つ開催した。熱年代モデルの構築に利用される HeFTy と QTQt のショートコースや統計プログラムのショートコースなどレギュラーコースに加えて、地球科学の Big Data の取り扱いに関するショートコース、地形発達解析に関するショートコース、構造発達史の研究に利用できるプログラムに関するショートコースを用意した。これらコースはボランティアの講師に支えられており、心より彼らに感謝したい。コースによっては事前の学習にも力を入れてくれており、その準備には並々ならぬ労力が割かれている。最終日のコースは、エントリーした人数に比して参加人数が少なかつたため、やや申し訳ない状況となってしまった。フライトの確保の都合上、プログラムは約2ヶ月前に公開したが、それでも少し遅かつたかもしれない。

### おわりに

この会議は2年毎に開催され、開催年には熱年代学に貢献した研究者を表彰している。今年の会議では初めて日本人が表彰された(図7)。おめでとうございます。

最後になるが、共催機関として、広報やスポンサーの確保にご協力いただいた日本地質学会、固体地球科学セクションの下、表層変動熱年代学フォーカスグループを設置して学術コミュニティにおける認知度の熟成に貢献いただいた JpGU、会議中の運営をサポートしてくれた学生の皆さん、スポンサーとして会議を支えてくれた京都フィッション・トラック(株)、電力中央研究所、石川県、金沢市、金沢コンベンションビューロー、金沢大学ダイバーシティ推進機構、島根大学総合理工学部地球科学科、アースサイエンス(株)、ブースを提供してくれた Lithodat と EPS に心よりお礼申し上げます。

### 引用文献

- 長谷部徳子, 2025, Thermo2025 中日巡検報告(Cコース:金沢市). フィッション・トラック ニュースレター, **38**, 63-66.
- 長田充弘, 2025, Thermo2025 中日巡検報告(Aコース:福井県立恐竜博物館). フィッション・トラック ニュースレター, **38**, 56-58.
- 中嶋 徹, 2025, Thermo2025 プレ巡検報告. フィッション・トラック ニュースレター, **38**, 51-55.
- 小形 学, 2025, Thermo2025 中日巡検報告(Bコース:能登半島). フィッション・トラック ニュースレター, **38**, 59-62.
- 末岡 茂, 2025, Thermo2025 中日巡検報告(Dコース:能登半島). フィッション・トラック ニュースレター, **38**, 67-69.



図1 参加者集合写真.

Fig. 1 Group photo



図2 会議の受付.

Fig. 2 A reception desk.

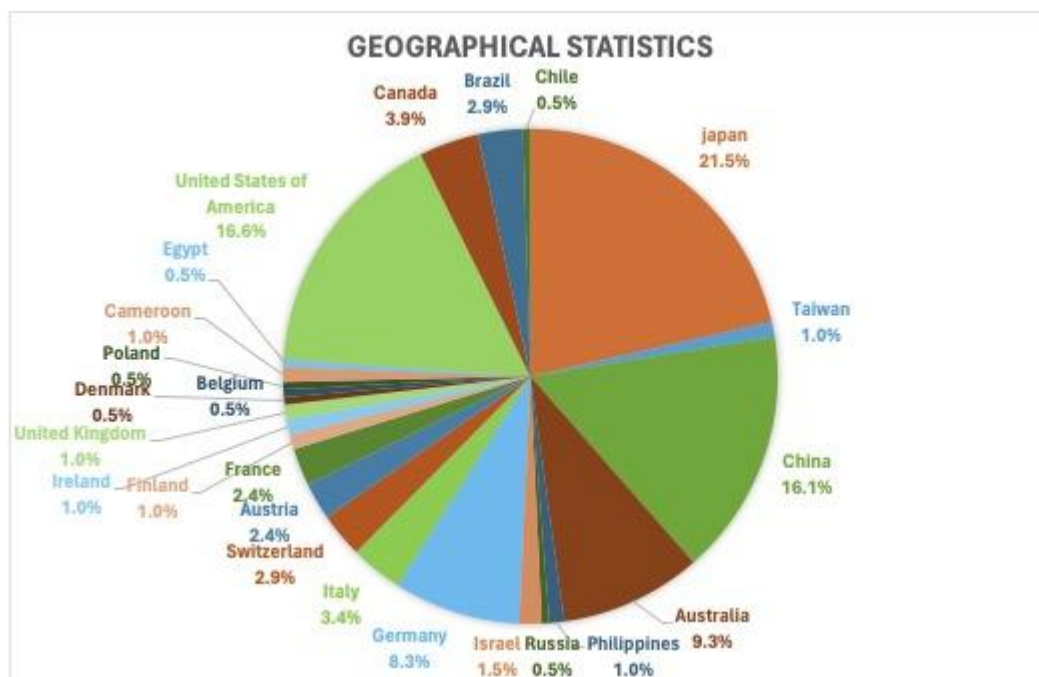


図3 国別参加者割合.  
Fig. 3 Geographical statistics of participants.



図4 ポスターセッション会場.  
Fig. 4 Poster session.



図5 学生発表賞受賞者.  
Fig. 5 Outstanding student presentation awardees.



図6 ショートコース.  
Fig. 6 Short course.



図7 受賞者.

左から Laslett 賞・田上高広, Dodson 賞・Jean Braun, Naeser 賞・Birk Härtel (敬称略).

Fig. 7 Awardees. Laslett prize to Takahiro Tagami, Dodson prize to Jean Braun, Naeser prize to Birk Härtel.